



石鎚山参拝

観音 七日

平成13年8月
第35号

発集発行

広島県安芸郡府中町
茂陰2丁目2-8-4
真言宗 正観寺
小出真行

仏の智恵の照すところ

衆生すなわち仏である

(嵯峨灌児文)

この暑い夏の早朝に、ポツと音を立てるかのようには開花する蓮の花は水中に咲いていてとても清浄感があります。暗い泥の中で育ちながら、大陽の光を得て芽を出し、花を咲かせますので「泥中の花」と申しますのはご存知と思います。

人間は欲が多く、思ったり、愚痴を言ったりで、ここはまるで汚れた泥の中にあるようですが、その泥の中にあっても仏さまを念ずる一念に、きつとここは清らかな花を咲かせるでしょうね。



天寿を全うする

「相続」という言葉の、元の意味をご存知ですか？この言葉、元は仏教の用語なのです。たとえば、種をまきますとそれが原因となって発芽が始まり成長し花が咲くという結果が生じ、やがてたわわな実を結びます。そしてその種から……というぐあいに、まず、原因と結果は連続して起こるわけですが、物事は単純な「因果関係」だけで起るものではない、というのが仏教のものの見方です。

土壌・水分・太陽の熱や栄養分など、さまざまな間接的な要因が脇から助けることによって、はじめて結果が成り立ちます。この間接的な要因を、仏教では「縁」といいます。これに対して直接的な要因を「因」というのです。

そこで正しくは、物事は因と縁によって結果を生じる、ということになります。因と縁。すでにおわかりのように、因縁というのはこのこととです。

相続というのは、この因縁と結果がとめどなく連続することを意味する言葉です。物事の成り立ちに直接関係しなくても、影響を与える要因となるわけですから、私たちの行動は慎重に

行わなければならないことがおわかりいただけだと思います。

人はたとえ病の床に就いても、他の人の支えになることができます。

技無き者は力をもって

力無き者は言葉をもって

言葉発し得ざる者は微笑をもって

微笑発し得ざる者は心をもって

とはいうものの、普段からの心構えが、いざというときに現れ、にわか仕込ではとても無理なことです。しかしどんな人も一様に「さようなら」をするときには、みんなの幸せを一心に祈り続けて天寿を全うするだろうと思いたいです。

では「天寿を全うする」とは、どういうことでしょうか。

普通、八十代あるいは九十代までの寿命を保って亡くなった人の場合「故人は天寿を全うして亡くなりました」と言っています。これは弔辞や葬儀のあいさつや常套句じょうたうくですから、誰でも聞いたことはあるはずで

では、いくつまで生きたら天寿を全うしたといえるのか、ということになると、これがまことに利然としません。平均寿命が伸びている折、

昔ならば「古来、稀なり」といわれた七十歳では、今日長命とはいえなくなりました。

例えば百歳まで元気で、ありとあらゆる悪いことをしつづけて亡くなったします。その場合、「天寿を全うした」と言えるでしょうか。これはおかしい、ということは誰でも感じるでしょう。いったい「天寿を全うする」とは、どういうことでしょうか。

天寿……天から授かった寿命、持って生まれた定命じやうめい。人間はこの世と別れの時がその人の天寿ということになります。寿命の長い、短いということには関係ありません。生まれてすぐに他界した赤ちゃんも天寿、一生懸命生き続け百歳まで生きられた。これもまた、天寿です。

ただ「全うする」ということになると、別の考えが必要となってきます。それは、生きるということの「質」の問題と違ってよいでしょう。人間（のみならず、すべての万物）は自分だけで存在することはできません。必ず他のものの支があつて、自分が成り立ちます。逆に言えば、人はどんなときでも、他のものの支えになる力を持っています。

お大師さまが伝承する曼荼羅の教えの意味の一つもここにあります。それが相互供養という

ことなのです。

従って、生きることの「生」というものは、他のものの支えになれるような働きがなされているかどうかにかかっているようです。

②インドと宗教の魅力

小 出 英 生

ヒンドゥー教

西紀四〇〇年ころに最終的に成立した二大叙事詩である「マハーバーラタ」と「ラーマヤーナ」は、今日まで、インドの一般民衆に親しまれてきた。とくに「マハーバーラタ」の一部である「バガヴァッド・ギーター」はヒンドゥー教の、いわば聖典として、人々に広く愛誦去れている。ヒンドゥー教における信仰対象は多種多様であるが、主要な神は世界を創造したブラフマー神、太陽の光を神格化したヴィシュヌ神、山に住み、力が強く狂暴な神と恐れられるシヴァ神である。とくに後の二神を最高神として信仰するヴィシュヌ派とシヴァ派が、ヒンドゥー教の主流をなしており、解脱の方法として神へのバクテイ（信愛の実践）を強調している。

ヒンドゥー教は、あらゆる民間信仰（原住民

・庶民の信仰）を取り込んで成立した宗教で、したがってあらゆるものが肯定・容認され、その意味での宗教的寛容ないし包容性が大きな特徴で、いわばインドにある、現実の信仰がヒンドゥー教そのものなのである。

「インド人はみな、宗教者であり、哲学者である」とわれるごとく、信仰心が篤く、まじめに生存を直視している。ヒンドゥー教の掟（ダルマ）に従って、一日一日を真剣に生きている。自然を愛し、動物と仲良く共存している。貧しくとも心豊かであり、物を大切にし、決して物を貪らない。

私を取り巻く社会は、実際、生活も豊かになり便利であるが、心の安らぎをはたしてもたらしめてくれるであろうか疑問である。

これからも、おりにふれ無数の顔を持つインドの多様性にふれてみたい。

へ…のようで…なのが十八条

冷たいようで 温かいのが 人の心
浅いようで 深いのが 心の傷
やりつくしたようで やり残したと思うのが 人生
やり残したようで 最後に納得するのが 人生

隠したつもりで 隠し通せないのが 嘘
低いようで 高いのが プライド

近いようで 遠いのが 故郷

小さいようで 大きいのが 欲

大きいようで 小さいのが 度量

強いようで 弱いのが 意志

簡単なようで 難しいのが 正直

しつこいようで あっさりしているのが 女

あっさりしているようで しつこいのが 男

うっとおしいようで 安心できるのが 親

励ましているようで 励まされているのが 友

悲しいようで 嬉しいのが 娘の結婚

凡人であり 案外偉人なのが 母

凡人であり 実際凡人なのが 父

案外と納得される方もあるでしょう。

施餓鬼とは

悪道に落ちて苦しんでいる衆生や、餓鬼に施す法会のことを施餓鬼会といいます。

その起源について次のように伝えられています。

釈尊の弟子である阿難が、ひとりて念法しているとき、見るからに身の毛もよだつ、恐ろしい鬼の焰口餓鬼が現われ、阿難に向って

「汝は三日後命が終つて餓鬼道に落ちる」と告げました。これを聞いた阿難は恐れおののき、どうすればその苦から免れるかと、鬼にたずねると、鬼は

「汝もし一切の餓鬼に飯食を施し、我がために三宝（仏法僧）を供養すれば、汝は長寿を得る、私もまた餓鬼の苦から免れて天上に救われる」と答えました。

そこで阿難は、早速、釈尊のもとに行き餓鬼に飯食を施す方法をうかがい、実行したために餓鬼道に落ちる難から、救われたことに始まります。

なお、今日では施餓鬼会を盂蘭盆会と並行に精霊を供養するために行われていますが、特に禅宗ではこの行動を重要視し盛大に行うようです。

ちなみに餓鬼道に落ちて苦しむ母を見て供養救済した回運と重なる感じはします。

「回向とは」

回向は廻向とも書きますが、これは梵語のパリナーマを訳した言葉、回轉趣向を略して回向と言うのです。

自分自身が仏道を行ずる功德を回らし転じて、

生者死者を問わずあらゆる人へ趣き向けることを言います。

お経の終わりに

「願わくは此の功德を以て普ねく一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」とお唱えしますが、これを回向文と言います。

「此の功德」というのは、仏様にお供えをしお経を読む功德であり、「普ねく一切に及ぼし」というのは、ただ自分の家の聖霊に回向するだけでなく、一切の有縁無縁の生きる者と死せる者、さらにすべての生き物たちに功德が及ぶように、ということなのです。また、「我等と衆生と」の衆生とは、衆くの生をえて生きているもの、すなわち生きているものすべてを指すのです。

仏教が慈悲の宗教であるといわれますのは、この回向という言葉ひとつ取つてもよく分かります。善いことを自分のことだけにしないで、すべての人に普ねく回わし向け、その善いことが世界のすみずみまで及ぶように、願うことが回向であり、仏教の慈悲の心のあらわれにほかなりません。

しかし、現在一般に「回向」とは、亡き人のために法要を営み、その功德によって死者が死

後の世界でより安穩でありますようにと祈ることと理解されているようです。法要では僧侶が「回向文」というものを唱え、亡き人の戒名（法名）を読み上げて、その故人に功德がめぐっていきますように祈念するようです。

ややもすれば了見がせまくなりがちですが本来の「回向」の意味を、今一度考え、広い心をもちたいものです。

「心の癒し」

みなさん、ややもすれば、心に潤いのない日々を送りがちではありませんか。

正観寺の「地藏まつり」では、法要とは別メニューで、「心におアシス」をと考え、般若心経と三味線、尺八、フルートとキーボードの法奏に続き、今年「チェロとピアノの楽しいひととき」を試みました。どうぞ、心に響く音を充分お楽しみ下さい。

